

# が ん 検 診

## ■ 胃がん検診（職域・地域）

職域検診では、X線撮影と内視鏡（施設検診のみ）による胃がん検診を行っている。X線による検診は、令和6（2024）年度は42,276名（男性30,584名、女性11,692名）が受診した。当施設で二次検診として内視鏡検査を行った115名から胃がんは1例も見つからなかった。一次検診での内視鏡による検診は、2,994名（男性1,825名、女性1,169名）が受診し、胃がんが3例、食道がんが2例発見された。

地域検診では、神奈川県下11市町村より委託を受け、検診車による検診を実施した。8,277名（男性3,832名、女性4,445名）が受診し、6例（男性4例、女性2例）の胃がんを発見した。

## ■ 大腸がん検診（職域・地域）

大腸がん検診は免疫学的便潜血反応を用いて行っている。

職域検診では、令和6（2024）年度は78,662名（男性53,729名、女性24,933名）が受診し、要精検者数は3,614名（要精検率4.6%）であった。

地域検診では、令和6（2024）年度に検診を受託した12市町村で検診を実施した。8,981名（男性3,375名、女性5,606名）が受診し、要精検者数は529名（要精検率5.9%）で、その中から19例（男性9例、女性10例）の大腸がんを発見した。

## ■ 超音波検診

腹部に超音波を当て、その反響を画像化する検診であり、何回行っても身体に全く害のない検査である。令和6（2024）年度は21,211名が受診している。がん検診の対象となる臓器は肝臓、膵臓、胆のう、脾臓、腎臓、副腎等であるが、超音波検査だけでは診断が困難であり、悪性腫瘍を疑う所見を認めた場合は「要精密検査」（467名全体の2.2%）として、超音波検査専門医による超音波外来を受診していただき、専門医療機関等へ紹介させていただいている。良性腫瘍である肝血管腫、脂肪肝、無症候性の胆のう結石や胆のうポリープなど「心配なし」とされ、経過観察の必要な病変については近医に紹介する他、当院での超音波外来にて経過観察を行っている。

## ■ 肺がん検診（職域・地域）

胸部X線と喀痰細胞診（ハイリスク者のみ）による肺がんのスクリーニング。専門医を含む読影経験の深い医師による二重読影を行い、過去画像があればそれを参照して比較読影を行っている。

職域検診ではその結果を依頼企業に返している。コロナ禍が過ぎ、実施団体（企業等）数は減少傾向で、受診者数も同様である。要精検率は0.9%、精検受診率50%で、肺がん発見数は1名で、その発見率は0.09%であった。なお、喀痰細胞診での肺がん発見はこのところ見られていない。

住民検診は県下の7自治体（横浜市を除く）から検診の受託と二次読影を行っているが、受診団体数や受診者数は減少傾向にある。要精検率は2.9%、精検受診率68.3%で、肺がん発見数は4名で、発見率は0.14%であった。また2自治体では医師会を介しての検診（二次読影）を行っている。横浜市の肺がん検診では平成20（2008）年度の開始時から当協会が中区での二次読影の一翼を担っている。

住民検診の流れは読影結果を医療機関へフィードバックし、要精検とされた例については各医療機関で最終判定をして、受診者に結果が伝達される。関係医療機関だけでなく関係自治体・医師会の担当部署を含めて、精度管理の向上に努めている。

MD-CTはこの年度では1,991名に施行しているが、このうち人間ドックや肺検診での低線量肺がん

CT検診実施は1,060名である。CT検診は希望者を対象とし、1 mSv程度の低線量で行っており、通常施行されているCT検査の1/10程度の被ばくにとどめている。CT検診認定技師が一次チェックを行い、疑診例ではその場で薄切り撮影を追加し、その後医師2名(1名は呼吸器または放射線診断専門医)が独立して読影している(二重読影)。CT検診受診者数は前年比5.9%減であった。要精検率は3.4%、精検受診率は69.0%で、肺がん発見数は1名、がん発見率は0.09%であった。

## ■ 子宮がん検診（施設・地域・車検診）

施設での検診は、診察(内診を含む)・細胞診による子宮頸部および体部のスクリーニングを実施している。希望によりHPV検査を行っている。問診と内診により発見される子宮筋腫や頸管ポリープなど、一般婦人科疾患の早期発見にも努め、適切に指示している。令和6(2024)年度、検診受診者数は15,067名であり、子宮頸がん1名、子宮体がん1名を発見した。

車検診は、問診・細胞診による子宮頸部のスクリーニングを行っている。県内の5大学病院と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」を組織し、精度管理・向上に努めている。診察・細胞採取・診断は、同検討会の各大学病院婦人科医師が担当している。

令和6(2024)年度、検診を受託した自治体は16市町村で12,491名が受診し、子宮頸がん2名が発見され、子宮体がんは1名であった。コロナが少しづつ落ち着きを取り戻し、施設、地域、車検診ともに受診者が回復傾向にある。

## ■ 乳がん検診（施設・地域）

施設での検診は年齢に応じてマンモグラフィ・乳腺超音波検査のいずれかあるいは両方を実施し、希望者には視触診を行っている。受診者には視触診の段階で中間がん(\*)を意識した自己触診の指導にも努めている。また当協会では一次検診での要精検者に対し総合的な二次検診まで実施している。二次検診では治療機関への紹介の必要性を検討し、病院受診が不要な受診者に対しては協会での経過観察も行っている。これにより病院への不要な受診によって被る負担を軽減するとともに、治療機関における初診外来の混雑緩和にもつながることを期待している。令和6(2024)年度は17,117名が受診し37例のがんを発見している。

検診車による地域での検診は、国の基準に準拠しマンモグラフィ検診を実施。読影は『神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会』の指導に基づき、検診マンモグラフィ読影認定医師が実施して令和6(2024)年度、検診を受託した自治体は16市町村で、10,446名が受診し44例のがんを発見した。

また平成18年(2006)年度より、“ピンクリボンかながわ”事務局としてNPO法人乳房健康研究会と共に、乳がんの早期発見・早期治療を目指し、乳がん検診受診率向上に努めている。

令和5(2023)年2月から施設検診にて3Dマンモグラフィ(トモシンセシス)検査を開始した。従来のマンモグラフィは、1回の圧迫で1方向から撮影し乳房全体を2次元的に表示している。3Dマンモグラフィは、1回の圧迫で角度を変えながら乳房をより多方向より撮影する、収集した画像データを3次元的に再構築し、複数枚の断層画像を得る方法です。従来のマンモグラフィに比べ、薄くスライスした画像になるため、病変が検出されやすくなると期待されている。また、この検査は、一般健診、人間ドックのオプション検査項目として実施している。

※がん検診で推奨される受診間隔の間に発見されるがん

## ■ 神奈川からがんをなくす会・ACクラブ

会員制のがん検診組織。ACとはAntiCancerの略。「神奈川から肺と胃のがんをなくす会」を前身として昭和51(1976)年に発足した。消化器(胃・大腸)がん・肺がん・乳がん・子宮がんの早期発見・治療を目指し、経年変化を追ったきめ細かい対応を行っている。